

古典落語に学ぶ



落語家
立川談四楼

第二十一回 初天神

初天神はつてんじんとは、一月二十五日に天満宮てんまんぐうや天神社にお参りに行くことです。

金 坊が遊びから帰ると、お父とつあんが珍しく羽織を着ています。

「お父とつあん、どこ行くの？」

「寄り合いだ」

「ウソだ。初天神に行くんだろ。あたしも連れてってよ」

「ダメだ。おまえは、あれ買ってくれ、これ買ってくれってうるさいから」

「そんなこと言わないよ。ねえ、大人しくしてらって約束するから連れてってよ」

連

れてっておやりよとおか母さんが口添えし、親子は初天神に参ります。

「お父とつあん、お店がたくさん出てるけど、あたし、あれ買ってくれ、これ買ってくれって言わないだろ？」

「そうだな。そうしてりゃいいんだ」

「お利口だろ。だからご褒美に何か買っておくれよ」

「ほうら、始まりやがった」

「ねえ、アメ玉買っておくれよ」

「ダメだ、甘えもんは虫歯になる」

「ちゃんと歯磨きするから買っておくれよ」

「おいアメ屋、何だってこんなところに店を出すんだ」

「へい、毎年出しております」

「ちょっと待て、お父っつあんが選んでやるから。これでもない。これでもない」と

「ちょっと旦那、いちいち指を舐めてから次のアメ玉をつままないでくださいよ」

「よし、これだ。いいか、噛みくだくんじゃねえぞ、口の中で転がすんだ。そうすりゃ長持ちするから」

金坊は旨そうにアメ玉をしゃぶります。

「ほら、よそ見るんじゃねえ。水ったまりがあるぞ、気をつけろ」

背

中をトンと叩いただけなのですが、金坊は泣き出しません。

「ウワン、アメ玉を落っことしちゃった」

「どこへ落とした。洗えば食えるぞ。どこにもねえじゃねえか」

「腹ん中」

「食っちゃまったんじゃねえか」

「今度は風買って」

「これは売り物じゃねえんだ」

「いえ、みんな売り物でございますよ」

「風屋、余計なことを言うな」

「坊っちゃん、ほら、これなんかよくお似合いでございますよ」

「そんな高え風を……」

「ほらお父っつあん、原っぱがあるよ。あそこで揚げよう」

「待て待て、最初が肝心だ。そこに風を持って立ってろ。で、お父っつあんがいいと言ったら放すんだ」

「ワイ、揚がった揚がった」

「よし、風に乗った。ほら、どんどん糸が出てくぞ。ほら、こうだ」

「お父っつあん、あたいにもやらしておくれよ」

「ダメだ、子どもにゃ無理だ。ほら、こうだ。これでも昔は風揚げで鳴らしたもんだ」

「ねえ、やらしておくれよ」

「ダメだっつんだよ」

「ああ、こんなことならお父っつあんなんか連れてくるんじゃなかった」

形

勢逆転のいいオチです。落語には大人を翻弄する子どもがよく出てきて、名前は金坊か亀坊と決まっています。その名前が出たら、あっ、子どもの噺だと分かるようにそうなっているのです。

今回は、正月らしい噺を紹介しましたが、現在、都会に原っぱはなくなり、風揚げはほほできません。風揚げができるというところは、子どもにとっていい環境に住んでいるということです。